

相ノ木っ子だより

平成30年度 学校だより 2 月 号 上市町立相ノ木小学校

進め、進め!行動あるのみ

「校長先生、スコップ取ってきていいですか」「ピロティ雑庫にあるから、鍵開けてもらわれ」「はい」 長期予報が見事的中し、今シーズンは降雪が少なく、暖かな冬になりました。昨シーズンの低温、大雪 を体験した身としては、たいへんありがたく感じます。ところが、6年生たちにとってはもの足りない冬 だったのです。

先月中旬、夜半からの雪がややまとまって降り積もった日がありました。6年生たちは、登校するとすぐにママさんダンプを使って玄関前の除雪を始めました。次々とやってくる6年生が使用し、やがて玄関のママさんダンプはなくなってしまい、冒頭のやり取りがあったのです。玄関の除雪道具がなくなったのなら、普通「まあいいか」となるところですが、その後に来る6年生たちは自分もしなければならないという思いであふれ、スコップを取りに行き、除雪に励んでいました。

わたしは、多少べちゃべちゃの雪質であったため、「そんなに一生懸命除雪しなくても」と思いましたが、登校する6年生が我先にと活動している姿にそんな思いを口にすることはできませんでした。そして、先生から言われるでもなく、学校のために貢献しようとする子供たちの気持ちをうれしく、また頼もしく感じました。以前にもちょっと雪が積もった朝、「校長先生、除雪しましょうか」と言ってきた6年生に「雪少しだから大丈夫だよ。ありがとう」と返したことがありました。今月に入ってからは、数回朝除雪する機会に恵まれました。「やっと自分たちの力を発揮できる」と、除雪に張り切る6年生たち。自分のできることを探し、進んで取り組む姿に確かな成長を感じました。

さて、そんな6年生の積極的な思いや実践の原動力は何なのでしょうか。最高学年としての責任感、学校全体を見渡しての気付き、他の人への思いやりや優しさ、友達との協力、先生からの支援、いろいろ考えられますね。いずれかかもしれませんし、全てかもしれません。どちらにしろ、自分で考え、実践することが大切です。「こうしたらいいんだな」と思っていても、なかなか行動に移せなかったり、自分はしなくてもいいかなという甘えが出たりするものです。おそらく6年生たちは、学校生活での学びや体験から、自分から行動することの素晴らしさや心地よさを体感しているからこそ、しっかりと実践できるのだと思います。

塩の辛さ、砂糖の甘さは学問では理解できない だが、なめてみればすぐ分かる

これは、パナソニックをつくった松下幸之助さんの言葉です。塩の辛さや砂糖の甘さというものは、いくら頭で考えたり、目で見たりしても分かるものではありません。自分で一口なめてみる、自ら味わってみて初めて分かります。実際に体を動かして活動し、振り返り、考えることが大切なんです。6年生はそんな体験をずっと積み重ねてきたのでしょう。先生方には、6年生の行動力を紹介し、褒め、「こういう子供たちを育てていきたいね」と話しました。

また、詩人であり、小説家でもある武者小路実篤の「進め、進め」という詩です。

自分たちは後悔なんかしていられない、 したいことが多すぎる 進め、進め。

麦ができそこなった それでもいいだろう 後の為になる 進め、進め。

何をしたらいいのかわからない、 しなければならないことを 片っぱしから、忠実に。 進め、進め。

後先や損得を考えることなく、とにかく行動あるのみ。前へ前へ、自分の感じたままに、考えたように 突き進むことが重要。失敗してもいいじゃないか、それは今後の自分のためになる。

相ノ木っ子のみんな、進め、進め!

相ノ木の歴史~相ノ木の魅力とは?~

この学校だよりを読んでいただく頃には、けん玉大会が終わっていることでしょう。今回は、もしかめの部と技の部を同日に行い、どちらも保護者の方に一遍に見てもらえるようにしました。おそらく子供たちはこれまでの練習の成果を発揮し、白熱した大会を繰り広げてくれたことと思います。

子供たちは、縄跳びとともにけん玉をずっと練習してきました。練習を積んできたことによって、 子供たちは大きな自信を得ています。だから、学校紹介の機会があれば、子供たちは率先してけん玉 を披露しています。また、相ノ木小学校と言えばけん玉大会というぐらい、けん玉は相ノ木小学校の 大きな特徴であり、自慢でもあります。そして、これまで数多くの相ノ木っ子によって大会の歴史と 伝統を重ねてきました。

では、その伝統はいつから始まったのでしょうか。校長室の書棚に並ぶ城が島をもとに調べてみました。もう一つの伝統である相撲大会については、学校だより10月号で書きましたが、比較するため詳しく触れさせてもらいます。相撲大会は、昭和60年10月に相撲場が作られ、11月に相撲場開きの大会が行われたのが最初です。ですから、通算すると今年度は第34回大会ということになります。けん玉大会は、それよりも少し古く、昭和59年2月に日本けん玉協会相ノ木支部に認定され、3月にけん玉集会が行われたのが始まりです。ですから、今年度は第36回大会となります。

文献によって大会の始まりは確認できますが、どのような経緯で相撲場作りやけん玉協会認定に至ったのか、どなたが言い始めたのかは分かりません。しかし、現在も相ノ木っ子が練習に励み、大会が盛り上がっているということは、創始者たる方々にとってうれしいことでしょうし、これほどの伝統となるとは想像もされていなかったかもしれません。歴史や伝統とはそういうもので、ちょっとしたことがきっかけで、延々と続くうちに大きな流れになっていくものなのかもしれません。

歌手のさだまさしさんは、著書「本気で言いたいことがある」で次のように言っています。

国の魅力とは、実はその国に住む「人の魅力」ではないかと思うのです。 この国に暮らす人々が魅力的であれば国そのものが魅力的になりますし、 人々に魅力がなければ国にも魅力などなくなります。 つまり「国とは人」と言えるかもしれません。

「国」を「地域」「学校」に置き換えると、相ノ木の魅力とは「地域に住む方々」「子供たち」の魅力と言えます。つまり、相ノ木小学校の特色である相撲やけん玉はあくまでも手段であり、その大会や練習に向かう子供たちの輝きが、伝統として息づき、ずっと続いてきたのではないでしょうか。

平成最後のけん玉大会を迎えるに当たって、「相ノ木の魅力は子供たち」ということを再認識することができました。

